

普通の人の哲学

個人主義にもとづく民主主義の確立

実存主義とプラグマティズムの融合

序文

普通の人が自分自身の哲学を表現したという意味で、本のタイトルを『普通の人の哲学』としました。当然のことながら、あくまでも哲学の素人ですので、自分自身の言葉で表現するのが難しいことから、やむを得ず他の本からの引用が多くなった結果として、おそらく読みづらいものになっていると思いますが、結論を急いで探さずに、哲学の先達の心に直接触れる機会だと思つて、楽しんで読んでもらえれば幸いです。

私がこの本で皆さんに話したかったことは、とても簡単なことですので、ここで要約しておきます。

まず、第一に、個人主義と民主主義はどちらか一方では成立せず、必ずペアでしか成立し得ないということです。つまり、民主主義は個人主義がなければ、病気にかかった集団主義であるところの全体主義になってしまうのです。その逆に、個人主義は民主主義の中でなければ利己主義として排斥されてしまふし、窒息してしまふのです。

第二に、実存主義とプラグマティズムが、ともに個人主義と民主主義の哲学的表現であり、両哲学は総論的にも各論的にも相互に矛盾せず、両哲学を学ぶことによって、個人主義と民主主義の「本質」をマスターできるといふことです。

最後に、この本を読んでくれた人が、「自分は個人主義者であり、したがって自分という個人を社会と調和させるために民主主義者となっているのだ」という自覚をもつてくれればとても嬉しく思います。つまり、一般には政治のシステムとしかみられていない民主主義も、個人主義と同じく「人間の生き方」なのだとなつて実践してほしいのです。

この本で論じた主な概念を皆さんにイメージしてもらえるように、他の本からの引用をいくつか次に挙げておきます。

まず、私がめざしている「普通の人の哲学」とは、ウィリアム・ジェイムズが次のように述べているように、自分の世界にびったり合うような哲学を自分で表現する哲学であり、それゆえに私という「普通の人」の心にもっとも完全な印象を与える力をもった、私の中で最後の勝利を占めるものの方です。

「ふつうの人で自分自身の哲学を的確に表現した人は少ない。けれどもほとんど誰もが、宇宙のもつ或る全体としての性格について、また自分の知っている特別な諸体系がそれとしっくり合致していないことについて、自分なりの感じをもっている。そういう体系は彼の世界にはびったり合ってこれないのである。」(二三頁)

「われわれ哲学者たるものは、諸君が抱かれるそういう感じを考慮しなければならない。繰り返していつておくが、すべてわれわれの哲学を最終的に裁くべきものはそういう感じなのである。最後の勝利を占めるものの方、普通の人の心にもっとも完全な印象を与える力をもった見方であろう。」(三四頁)

※ウィリアム・ジェイムズ『プラグマティズム』(梶田啓三郎訳 岩波文庫)の第一講「哲学におけるこんにちのデイレンマ」

次に、私がめざしている「哲学」とは、ヤスパースが教えてくれるように、大衆である普通の人が自ら行わねばならず、自分に起こるかもしれない一切のものに対して覚悟を決めさせるものであり、私に「決断の自由な空間」をもたらすものでなければなりません。

「私たちは現在哲学するということをご自ら行なわなければなりません。ここでは私は、二つの課題を指示することにとどめておいてもいいでしょう。」

第一に、哲学的洞察を伝達するにあたっては、だれでも近づきやすく、また納得のいくような形式を見出すこと。なぜなら哲学は、各人のために、そして大衆のために存在するからです。

第二に、思想が内的行為となりその内的行為において、人間らしい人間にとって必要な回心が生涯にわたって繰り返し起こるようになる—そういう思想を成就すること。なぜなら、哲学はおのおのの単独者の現在のために現存するからです。すなわち、哲学はおのおのの単独者の実存的意識を明晰にし、彼がそのために生死を賭けようとするものを明瞭にし、なしうることをなそうとする意志を強め、起こるかもしれない一切のものに対して覚悟を決めさせるのです。」(八二頁)

※ヤスパース『根源的に問う』哲学対話集(ハンス・ザーナー編)(武藤光朗・赤羽竜夫訳)

「本来の『哲学すること』は知の確かさをもたらしなさいで、本来の自己存在にその決断の自由な空間をもたらすのであります。」(六五頁)

「哲学的な言葉は、聴く者自身の存在によって補われることを要求する。」(六五頁)

「人は誰でも哲学において、彼が本来すでに知っていたものを理解するのであります。」(六五頁)

※ヤスパース『哲学入門』(草薙正夫訳 新潮文庫)

次に、TVのコマーシャルでよく耳にする金子みすゞの詩の一節である「みんなちがって、みんないい」はまさしく個人主義の標語でもあります。その詩を引用しておきます。

「私と小鳥と鈴と」

私が両手をひろげても

お空はちつとも飛べないが

飛べる小鳥は私のように

地面(ちべた)を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても

きれいな音は出ないけど

あの鳴る鈴は私のやうに

たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私

みんなちがつて、みんないい。」

※『さみしい王女』金子みすゞ全集・Ⅲ（JULA出版局）（二四五頁）

本当の意味での民主主義が個人主義に立脚する必要があることについては、林望さんが次のように述べておられます。

「もつとも大切なことは、本当の意味での民主主義というものは、もとより個人主義に立脚するという事です。そして、自分の意見を堂々と述べることは大切ですが、しかし同時に、自分と違う意見を十分に聞くという度量も要求されるのです。それが個人主義ということなのですからね。」(一三四頁)

※林望『新個人主義のすすめ』(集英社新書)

次に、実存主義を表現している小説としては、一般的にはサルトルの『嘔吐』が挙げられることが多いのですが、私はハイリッヒ・ベルの小説を挙げることにします。なぜなら、実存主義のテーマは「不安」ではなく、「自由」だと思っからです。

「ことによったら彼女を追って、むりに引きとめることはできたかもしれない—しかし、人間を強制するということはできないものではない。できるのは殺すことだけだった。これが、人間に対して加えることのできる唯一の強制だった。人間に対して生を強いることはできなかった。愛もまた強いることはできなかった。それは無意味なことだった。人間に対して実際に力をもっている唯一のもの、それは死だった。そこで今、無意味なこととはわかっていても、彼は待つよりほかはなかった。おそらく一時間以上、今晚一晩待っているだろうということも、わかっていた。なぜなら、これが彼らをたがいに結びつけている唯一のものだったから。彼女が指さしたこの小さなカフエーが。そしてただ一つ確かなことは、彼女は嘘をついたのではないということだった。彼女は来るにちがいない。すぐに、大いそぎで。できるだけ速く。来る来ないを決める力さえ彼女にあつたら・・・」(一一一—一一二頁)

「まったく馬鹿なことだ。第六弾が両親の家の破風にあたった—石が落ち、漆喰が粉になって往来にこぼれた。

そして地下室から母親の叫ぶ声が聞こえた。彼はいそいで家に這い寄った。第七弾の発射音を聞いて、着弾しないうちに彼は叫んだ。ひどく大きな声で二三秒叫び、死ぬのが一番簡単でなかったことが、忽然としてわかった。それから大声で叫んでいるうちに、榴弾が彼にあたった。そして死にながら彼は家の闕の上へころがって行った。旗竿が折れて彼の上に落ちた。」(二二七頁)

※ハインリヒ・ベル『アダムよ、おまえはどこにいた』(小松大郎訳 講談社文庫)

次に、サルトルの実存主義とヤスパースのそれとの違いを良く表している記述を、ヤスパースの言葉から引用しておきます。実存主義といえども実存を絶対化させてはいけません。

「戦前・戦中を通じて私は、孤独な境遇の中で『真理について』を書きました。この本は戦後になって初めて公にすることができました。そこでは、私たちが自分をもその内に見出すところの場所の契機、すなわち現存在、悟性、精神、実存、世界存在、超越者が問題とされており、そして当時私は、これらの個々の要素が切り離され、そして絶対化されることによって起こる誤謬を列挙し、こうした絶対化を次のように名づけました。つまり、私はこういうぐあいに書いたのです。『自然主義では単なる現存在が、合理主義では単なる悟性が、観念論では単なる精神が、実証主義では単なる世界存在が、実存主義では単なる実存が、無宇宙論では単なる超越者が、それぞれ絶対化される』。(七〇〜七一頁)

※ヤスパース『根源的に問う』哲学対話集(ハンス・ザーナー編)(武藤光朗・赤羽竜夫訳)

最後に、プラグマティズムの定義をジェイムズの言葉で紹介しておきます。これが、パースのプラグマティック・

マキシムといわれているものです。

「この語（プラグマティズム）がはじめて哲学に導き入れられたのは、一八七八年チャールズ・パース氏においてであった。この年の『通俗科学月報』一月号掲載の『いかにしてわれわれの観念を明晰にすべきか』と題する一論文において、パース氏は、われわれの信念こそほんとうにわれわれの行動を支配するものであることを指摘した後で、次のように述べている。およそ一つの思想の意義を明らかにするには、その思想がいかなる行為を生み出すに適しているかを決定しさえすればよい。その行為こそわれわれにとつてはその思想の唯一の意義である。すべてわれわれの思想の差異なるものは、たとえどれほど微妙なものであっても、根底においては、実際上の違いとなつてあらわれぬほど微妙なものは一つもないということとは確かな事実である。そこで或る対象に関するわれわれの思想を完全に明晰ならしめるためには、その対象がおよそどれくらいの実際的な結果をもたらすか―その対象からわれわれはいかなる感動を期待できるか―いかなる反動をわれわれは覚悟しなければならぬか、ということをよく考えてみさえすればよい。そこで、これらの結果がすぐに生ずるものであるとずつと後に起るものであると、いづれにしてもこれらの結果についてわれわれのもつ概念こそ、われわれにとつては、少なくともこの概念が積極的な意義を有するとする限り、その対象についてのわれわれの概念の全体なのである。」（三九〇頁）

※ジェイムズ『プラグマティズム』（榎田啓二郎訳 岩波文庫）

普通の人の哲学

目次

第一章	私の哲学遍歴	1
第二章	個人主義と民主主義の定義	52
	I 個人主義の定義	52
	II 民主主義の定義	70
第三章	個人主義と民主主義についての法律学的世界定位	87
第四章	個人主義についての哲学的世界定位(個人主義哲学総論)	94
	I 個人主義と実存主義	94
	II 個人主義とプラグマティズム	117
	III 実存主義的個人主義とプラグマティズム的個人主義	125
第五章	民主主義についての哲学的世界定位(民主主義哲学総論)	134

あとがき	224
第六章	156
I 民主主義と実存主義	134
II 民主主義とプラグマティズム	148
III 実存主義的民主主義とプラグマティズム的民主主義	154
実存主義とプラグマティズムの融合（個人主義・民主主義折衷各論）	156
—ヤスパースとウィリアム・ジェイムズ—	
I 認識論について	157
II 存在論について	166
III ウィリアム・ジェイムズにおける認識論と存在論	173
IV ヤスパースにおける認識論と存在論	196
V 結論	216